

とほく街道会議



東北の街道から夢・未来を語る

街道と舟運の歴史から 新たな東北の未来へ

第2回交流会 福島大会

日時 9月30日 ⊕ 交流会
10月 1日 ⊖ 街道探訪会
会場 ホテル福島グリーンパレス(福島市)

報告書

とうほく街道会議

第2回交流会 福島大会 プログラム

9/30
土

I 交流会 13:00~17:15

1.あいさつ 13:00~13:25

福島市長 瀬戸孝則氏

とうほく街道会議代表幹事 渋川恵男氏(福島県)

とうほく街道会議顧問(株)ジェイティービー常務 清水慎一氏(東京都)

NPO全国街道交流会議代表理事 田中孝治氏(静岡県)

2.基調講演 13:30~14:30

結城登美雄氏 「わが地元学~街道を通じた地域づくりを考える~」

3.活動報告 14:35~15:20

(1)「街道交流・今までの五年、これからの五年」NPO全国街道交流会議専務理事 古賀方子氏(福岡県)

(2)「まちづくりはひとづくり」福島の城下まちづくり協議会副会長 中川弘道氏(福島県)

(3)「時代とともに変遷する道」国土交通省福島河川国道事務所長 植田雅俊氏

4.意見交換会 15:35~17:15

●第1会場 テーマ 街道と阿武隈川舟運

街道と舟運を連携させた地域づくり

●第2会場 テーマ 東北における日本風景街道(シーニック・バイウェイ・ジャパン)の展望

日本風景街道による東北らしい地域づくりを求めて語り合う

●第3会場 テーマ 『日本奥地紀行』が地域を結ぶ

イザベラ・バードに出会う地域プロジェクト

II 街道談義 17:30~19:30

福島県内の地酒を酌み交わしながらの情報交換

10/1
日

街道探訪会 8:30~14:30

「奥州街道福島路と羽州街道起点を巡る旅」※バスツアー(一部徒歩を含む)

福島駅西口集合(バス乗り場)~福島城下(徒歩)~阿武隈川船着場~

奥州街道・瀬上宿~桑折宿~奥州・羽州街道分岐点~半田銀山史跡公園~

羽州街道・小坂宿~小坂峠(徒歩)~福島駅西口解散

「とうほく街道会議」第2回交流会 福島大会実行委員会	
実行委員長	福島市長
副実行委員長	福島商工会議所会頭
顧問	福島県土木部長 国土交通省東北地方整備局道路部長
委員	とうほく街道会議代表幹事 ふくしまけん街道交流会事務局長 東日本高速道路(株)郡山管理事務所長 みちのく街道研究会副会長 桑折町助役 国見町助役 福島県土木部道路領域総括参事 福島県北建設事務所長 国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所長

わが地元学

民俗研究家・結城登英雄氏

街道を通じた地域づくりを考える



基調講演をする結城登英雄氏

結城登英雄氏プロフィール

1945年中国(旧満州)生まれ。山形県大江町で育つ。山形大学人文学部卒業。宮城教育大学非常勤講師。東北各地の地域起こし活動に携わり、住民を主体にした地域づくりの手法「地元学」を提唱。「地元学」と「食の文化祭(宮城県宮崎町=加美町)」で平成16年度(第55回)「芸術選奨文部科学大臣賞」(芸術振興部門)受賞。

自分の住む地域をよくしていこう、そのためにはどうすればいいのかというのが地元学だ。十数年にわたって東北の中山間地域の村を600ほど訪ね、3000人ほどの老人に会い、これまでの暮らしについて話を聞きたくさんのことを学んだ。

江戸時代の日本は7万を超える村の集まりで、その村をつなぐのが道だった。暮らしの基本は自給自足で、足りないものは交易で補うが、交易の拠点が市で、金だけを媒介にするのではなく、「おたがいさまの心」で必要なものを交換する場でもあった。現在にその心をひきついでいるのが、全国に1万カ所にもなった農産物などの直売所だろう。

道は立派になったが、その道をどのように活かすかは、しっかり意識されているとはいいがたい。塩を運んだ「塩の道」(べごの道)、鯖の「鯖街道」、紅花の「紅花の道」などを歩いてみると、人の暮らしがあるかぎり道はつながっている。旅ということばの語源には「旅とは他火」(他人の火にあたりに行く)、「たまえ」(柳田国男・たべものを恵んでほしい、から転じて)がある。生涯を旅に生きた民俗学者の宮本常一は、人の手が加わった温かい風景、その温かいものを求めて旅をすと言っている。昔の人は、わが暮らし、村の暮らしをよくするために旅に出たが、それに習い私たちが古きを訪ね、次なる未来への道の普請係りになるための役割を果たしていかなければならない。

これからの道として「食べ物の道」を考えたい。日本の食糧自給率は40パーセントほどで、東京1パーセント、大阪2パーセント、神奈川3パーセント。それに対して東北各県は80~100パーセントだ。その食べ物をつくる人や地域と消費者が、食べ物を媒介にしてつながる道づくりができないかと考えてきたが、10数年前にはじめて出現した農産物直売所がその端緒となった。

国道、県道、高速道、すべては経済の道である。地域をつなぐもうひとつの道づくり、暮らしの道づくりが必要であり、そのために道を通じ合っつながり、おたがいさまでささえあっていく関係を構築する時代が到来した。



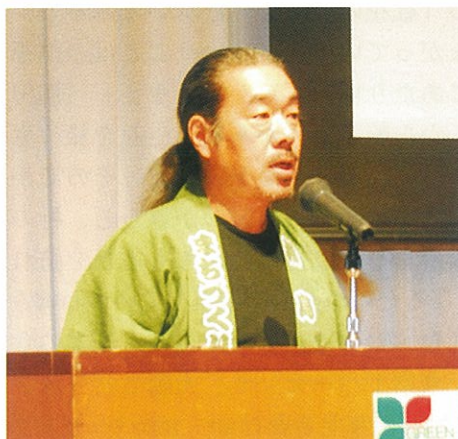


古賀方子氏

古賀方子氏・NPO法人全国街道交流会議専務理事(福岡県) 「街道交流・今までの五年、これからの五年」

道を連携の軸として捉え、街道がつながってこそ力が発揮されるとの思いで、全国で街道の地域づくりをしている団体によびかけ「街道フォーラム2001」を開催し、2002年に全国街道交流会議の第1回全国大会を山口県萩市で開いた。

2回目は静岡で開き、東海道を大阪、京都の側からの視点で捉えなおそうとした。3回目は羽州街道の上山大会、4回目は四国の松山で開いた。11月には飛騨高山大会を行なう。来年は富山県の高岡市で「万葉の道」をテーマに全国街道交流会議を開催する。後世に残すべき景観をどのようにして残し伝えていくのが課題だ。美しい道や町を残していくため街道を通じていろんな人と結ばれるようにしたい。



中川弘道氏

中川弘道氏・福島の城下まちづくり協議会副会長(福島県) 「まちづくりはひとづくり」

生家のある町(中町)が廃れてしまう状況を何とかしなければと、平成12年「福島の城下まちづくり協議会」を立ち上げた。奥州街道や町の歴史的な史跡、建物、自慢の店などを紹介、案内する道標や高札をつくり、地図を片手にここを訪れてくれる人がふえることを願いながら絵地図をつくった。福島市や福島大学、福島学院大学などの職員・学生と一緒に活動し、町の案内とか催し物・祭りの紹介などを載せた瓦版もつくっている。ほかに「奥州街道福嶋村」、「御蔵町界限町づくり協議会」など幾つかの団体の活動も兼ねて「うまいもの市」、「絵画コンテスト」、「歴史探訪会」、「川柳コンテスト」などを開催している。



植田雅俊氏

植田雅俊氏・国土交通省福島河川国道事務所長 「時代とともに変遷する道」

時代の要請に応じて道路は姿を変えていくが、地域づくり、国づくりを支える道の原点にあったのは街道だ。江戸時代から現代に至るまで、福島と米沢を結ぶ道づくりは、間にそびえる奥羽山脈との闘いであった。16世紀のなかごろまで、福島から奥羽山脈を越えるには、小坂峠を通過して二井宿峠にぬける羽州街道のルートだけだったが、江戸時代になって板谷街道が開かれ、参勤交代の道、物流の道として阿武隈川の舟運とともに機能していた。

しかし、急峻な山あいの狭い道路であったため、明治になり馬車も通れるようにしようと万世大路が建設され、福島、米沢間の交流は格段と便利になった。その後、モータリゼーションの急速な進展にあわせ、昭和41年に現在の国道13号ができ、さらに福島、米沢間の安定的な連携を支えるため東北中央自動車道の整備が進められている。

街道と阿武隈川舟運

街道と舟運を連携させた地域づくり

コーディネーター 福島県教育庁県立学校グループ
主任管理主事・守谷早苗氏

大名は参勤交代制度のため、一年ごとに江戸で大勢の家臣とともに暮らす消費生活をしなければならなかった。その貨幣を手に入れるなどのため、年貢米を高く売る必要があり、消費者の多い江戸や大阪などに米を運んで換金しなければならなかった。会津藩の場合、年間10万俵もの米を運ぶため、陸送では莫大な馬と人員がかかる。コストダウンの最良の方法が、一度に数十俵を運ぶことができる舟運であった。

アドバイザー 前福島市長・吉田修一氏

かつて福島を中心とした信達地方は繭の生産が盛んで、19世紀の後半にはフランスに蚕種を輸出していたが、蚕種を横浜港まで運ぶのに阿武隈川の舟運が大いに利用された。町を育成するための力となったのが奥州街道であり、羽州街道であるが、阿武隈川の舟運も町に文化と経済を供給してきた。そのような歴史を感じさせるような、かつての日銀福島支店の役宅裏で福島河岸の復元なども試みた。

三宿地域連携協議会事務局長・島津憲一氏

宮城県の七ヶ宿、山形県上山市の楢下宿、高島町の二井宿というかつての宿場が集まり、2001年から具体的な連携活動をしている。江戸時代、天領だった高島から江戸へ米を運ぶには二井宿峠を越え七ヶ宿、小坂峠と羽州街道を通り、桑折の上郡河岸から阿武隈川舟運で海に出て東回り航路を使うコースだった。我々の協議会ではこうした御城米の道や二井宿峠の古道などを歩く企画を通して、三宿の連携をはかっている。

福島市総務部参与兼次長・柴田俊彰氏

阿武隈川舟運の中流域の起点は福島で、福島河岸には街道と直結した蔵があった。山形から羽州街道を運ばれた米は、上郡河岸から阿武隈川舟運で宮城の荒浜に運び小回り舟で松島の寒風沢、そして太平洋に乗り出して江戸に向った。

去年、福島河岸から江戸時代の渡利河岸まで船下りをした。参加者から「川から見る景色の美しさは素晴らしい」「これからも期待したい」といった声が寄せられた。

仙台郷土研究会副会長・吉岡一男氏

信達地方の養蚕のための肥料は仙台領、蝦夷地などから阿武隈川を遡上して運ばれていた。阿武隈川は天領の御城米を運ぶ川の道として知られているが、ほかにも下り舟で葉たばこ、楮、藍、雑穀類、木材などいろいろなものが運ばれた。かつては江戸の経済を東北の米経済がまかなっていた歴史があり、その歴史のなかで果たした川の役割を知らせていくのも大切だ。

「ぶらり日本歩き旅」著者・森崎英五朗氏

親子3人で阿武隈川約200キロを8日間かけて泳いだことをきっかけに、阿武隈川を舞台にした「川リンピック」などのイベントを重ねてきている。トライアスロンや水きり、石積みなどだ。それまで子どもが川で遊んだり、泳いだりする光景をあまり見ることがなかったのに、イベント開催後は、阿武隈川に入ったりして遊ぶ子どもをたくさん見るようになった。これからも、イベントに参加して川と川の歴史に興味を持ってもらいたい。



東北における日本風景街道 シーニック・ バイウェイ・ ジャパン の展望

日本風景街道による東北らしい地域街道を求めて語り合う

コーディネーター 岩手県立大学教授・元田良孝氏

自動車を通すことを目的として行われてきた道路づくりを見直す時期にきているなかで、日本風景街道のように風景を道のモーメントにする視点は重要だ。

アドバイザー 国土交通省東北地方整備局
道路計画第二課長・伊藤友良氏

道を介して他の地域との交流をはかり、そこから生まれる歴史と文化に親しむ活動を通じて、地域コミュニティの再生を目指すのが日本風景街道だ。全国から72ルートの応募があり、東北からの応募は10ルートだった。キーワードは歴史、民話とか伝統芸能、文化、自然景観、町並みなどで、国土交通省では仕組みづくりについて検討している。



小坂峠より信達平野を望む

「みちのくおとぎ街道」代表・一條達也氏

山形県の南陽市、高島町、宮城県の七ヶ宿町、白石市が一緒になって民話や伝承を通じて「おとぎ文化」の発掘と継承、景観づくりと観光振興をはかる活動をしている。いまある「夕鶴の里記念館」「浜田広助記念館」などのほか、ナショナルブランドになりうるものを見つけ、「おとぎ」の原風景を感じてもらえる観光地づくりをしたいと考えている。

「出羽の古道六十里越街道会議」議長・小関祐二氏

最盛期には半年で12万7千人が詰めかけたという湯殿山詣での道が六十里越街道だ。街道沿いはブナなどの広葉樹に覆われ、多層民家が残る田麦俣集落などがある。しかし、街道周辺の魅力・文化を守っていくには、住民がここでそのまま暮らし、お金をおとしてもらう仕組みをつくらなければと、六十里越街道を整備し観光客を呼ぶ活動を続けてきた。さらにこのあとも湯殿山信仰の道を整備活用していきたい。

「秋田のみち・文化再発見の会」代表・賢木新悦氏

「知的好奇心を満たす観光振興」をテーマに、秋田県に29年間住み、2500枚にのぼる図絵を残した菅江真澄にスポットをあてた活動をしている。真澄の生きた200年前の風景と同じ光景を見ることで、より深く文化などを知ることができるというのがポイントで、この11月には羽州街道と菅江真澄をからめ、真澄の描いた名水と発酵食文化をたずねるモニターツアー「菅江真澄と巡るきれいになる旅」を行ない、アンケート調査を実施する。



「日本奥地紀行」が地域を結ぶ イザベラ・バードに出会う地域プロジェクト

コーディネーター 宮城大学助教授・宮原育子氏

イザベラ・バードが書いた日記『日本奥地紀行』を地域づくりなどに役立てようとする、さまざまな展開が東北各地で行なわれている。東北はバードから宝物をもらったと、私は思っている。

福島県立博物館専門学芸員・佐々木長生氏

バードが東北を旅したのは、近代化の夜明け前だった。『日本奥地紀行』には、でこぼこな道、不衛生な村人の暮らしなどがあるのまま描かれている。同時に自然景観や人々の心づかいの細やかさなどに対する賞賛の記述も多い。

この本に書かれた所を、バードの気持ちになって歩いたことがあったが、豊かな気持ちにさせられた。小・中学校の総合学習の時間に『日本奥地紀行』を活用して学習し、バードが旅した130年前の時空を追体験してほしい。

元「イザベラ・バード『日本奥地紀行』再現ウォーキング大会」
プランナー・渡部雅俊氏

『日本奥地紀行』に書かれた道を地域振興や鉄道経営の一助にすることができないだろうかと考え、平成16年に「イザベラ・バード『日本奥地紀行』再現ウォーキング大会」を開催し、栃木県と福島県の4町村で観光客など300人が参加して下野街道を行進した。このイベントによって、県境を越えた交流やネットワークが形成されたことと、バードの知名度がかなり上がったことが成果だった。

黒沢峠敷石道保存会会長・
保科充氏

イザベラ・バードも通った越後と米沢を結ぶ越後街道の要所、山形県小国町にある黒沢峠で昭和55年、街道時代の敷石3600段が確認され、我々は保存会を発足させて活動を続けている。保存会には黒沢地区の全19戸が加入しており、清掃や草刈り、補修作業といった保存活動の他、案内板の設置などの活動を25年間にわたって続けている。

訪れる人が増えたが、イベントや保存活動に関わることのできる人数が少ないので、活動継続の岐路に立たされている。

上山まちづくり塾副塾長・井上睦夫氏

平成16年に全国街道交流会議上山大会を開いたことが、イザベラ・バードに触れるきっかけだった。バードが旅したときに受けたであろう、上山独特のもてなし方で大会参加者をもてなした。上山まちづくり塾ではそれをもっと広めていくことと、バードが目にしたであろう上山の景観を残し、あるいは復活させようという運動をしている。上山にある観光資源を活かしながら保存、後世に残していく仕掛けを考えていかねばならない。



晩年のイザベラ・バード



9月30日㊥ 交流会



開会あいさつ・福島市長 瀬戸孝則氏



あいさつ・とうほく街道会議代表幹事 渋川恵男氏



あいさつ・とうほく街道会議顧問 清水慎一氏



あいさつ・NPO法人全国街道交流会 田中孝治氏



第2回交流会福島大会から第3回交流会・岩手大会への引き継ぎ式



にぎわうパネル展

10月1日㊥ 街道探訪会



復元された福島河岸



桑折の奥州・羽州街道追分につくられた公園



羽州街道一の難所だった小坂峠



小坂峠頂上で記念撮影

- 主催/「とうほく街道会議」第2回交流会福島大会実行委員会(とうほく街道会議 福島商工会議所 福島県 福島市 桑折町 国見町 国土交通省東北地方整備局 東日本高速道路(株)東北支社 (社)東北建設協会・みちのく街道研究会)
- 後援/福島民報社 福島民友新聞 朝日新聞福島総局 毎日新聞福島支局 読売新聞福島支局 河北新報福島総局 NHK福島放送局 福島テレビ 福島中央テレビ 福島放送 テレビユー福島 ラジオ福島 ふくしまFM 福島コミュニティ放送FMポコ NPO全国街道交流会議 NPO奥州街道会議 羽州街道交流会 ふくしまけん街道交流会 浜通り歴史の道研究会 東北街道連絡協議会
- 協力/JR東日本福島駅(JR東日本仙台支社)

「とうほく街道会議」事務局

〒980-0021 仙台市青葉区中央2丁目9の1河西ビル (株)東北地域環境研究室内
 TEL.022-212-1105 FAX.022-212-1106
 ホームページ <http://www.tohoku-kaido.com> E-mail info@tohoku-kaido.com